



クルアーンの翻訳と「反クルアーン  
Antialcoranes」文学：  
『ムハンマド信奉者の宗派の混乱  
あるいはそれへの反駁』を手がかりに

押 尾 高 志

はじめに

1492年にナスル朝グラナダ王国を征服したことで、カステイーリャ王国は、それまでにない規模の大量のムスリム人口を抱え込むことになった。グラナダの降伏協定には、「いかなるモーロ人[ムスリム]も、彼または彼女の意思に反してキリスト教徒になることを強制されることはない」という文言はあったものの、あくまでこれは手段としての「強制」に対する規制であり、ムスリムをキリスト教へ改宗させること自体は、新しいキリスト教化したグラナダを創出するためにも必要不可欠であると認識されていた<sup>(1)</sup>。

(1) 14世紀半ばにアルフォンソ11世によって実定法化された『七部法典 *Los siete partidas*』にも、「キリスト教徒は、モーロ人[ムスリム]を良い言葉によって、そして強制によらずに改宗させるべきである。適切な言葉や説教によって、モーロ人をわたしたちの信仰に導き、それを信じさせるよう努めるべきであり、力や圧力によってではない」と条文にあるとおり、ムスリムをキリスト教へ改宗させること自体は、当然望ましい行為であるとみなされていた。L. P. Harvey, *Islamic Spain, 1250-1500*, Chicago: The University of Chicago Press, 1992, p. 319; I. Poutrin, “Los derechos de los vencidos: las capitulaciones de Granada (1491),” *Sharq al-Andalus*, vol. 19, 2010, pp. 21-22.

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

グラナダのキリスト教化事業に携わったのは、グラナダの初代大司教に任じられたエルナンド・デ・タラベラ(ca. 1430-1507)と、トレード大司教および枢機卿のフランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロス(1436-1517)であった。タラベラが言葉と説得によって、特にアラビア語を用いた宣教活動の実施を目指したのに対して、1499年以降改宗事業を引き継いだシスネロスは、賄賂や脅迫を用いた改宗や、アラビア語で書かれた宗教関連書物の焚書などを推進した。タラベラとシスネロスの間には、キリスト教化に対するアプローチの差異は存在していたものの、両者はムスリムの改宗と改宗者のキリスト教社会への統合という目的を共有していた<sup>(2)</sup>。

1499年に、シスネロスの積極的な改宗政策に抵抗するグラナダのアルバイシン地区のムスリム住民による暴動が勃発し、その後周辺地域にも反乱は広がった。これを契機として、カトリック両王(イサベルとフェルナンド)は正式に降伏協定を破棄し、反乱を鎮圧した後の1502年には、カスティーリャ王国域のムスリム住民に対して、改宗か国外退去かを迫る事実上の強制改宗令を布告した。同様の王令は、アラゴンでは1526年に布告され、以後半島にムスリムは法的には存在しなくなり、キリスト教へ改宗し残留した元ムスリムたちは、モーロ人新キリスト教徒、あるいはモリスコと呼ばれるようになった。

しかし、強制改宗令の発布後も、タラベラの改宗路線が完全に放棄されてしまったわけではない。彼のもとでアラビア語を用いた宣教活動に従事していた聖職者たちは、1502年以降もアラビア語を用いて、ムスリムの改宗・福音化を目指し続けていた。その流れに棹さす形で、16世紀前半には、カスティーリャ語に訳出されたクルアーンを用いてイスラームを論駁し、ムスリムの改宗につなげることを目的とする一連の著作群が現れた。これらは、近年の研究では「反クルアーンAntialcoranes」文学と分類されるようになった<sup>(3)</sup>。イベリア半島では14世紀末

---

(2) L.F. Bernabé-Pons, “The Last Muslim Inhabitants of a Newly-Christianized Granada: Mudejars and Moriscos,” in *A Companion to Islamic Granada*, ed., Bárbara Boloix-Gallardo, Leiden, Boston: Brill, 2022, pp. 234-237.

以降、支配下にムスリム住民(ムデハル)を抱えるキリスト教徒君主によるイスラーム法の把握という要求を満たすため、イスラーム法学書のロマンス諸語(カスティーリャ語やカタルーニャ語)への翻訳は行われていたが、クルアーンの口語翻訳はまだほとんど存在しなかった<sup>(4)</sup>。

本稿では、「反クルアーン」文学の著作群のなかでも最初期の作品であり、タラベーラの改宗事業にも従事していた元アルファキー(法学者、アラビア語はfaqīh)の改宗者、フアン・アンドレスの著作である『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁 *Confusión o confutación de la secta mahomética* (以下、混乱)』<sup>(5)</sup>を取り扱う。『混乱』は、預言者ムハンマドの預言者性やクルアーンの啓典としての真正性を論駁し、イエスのメシア性や聖母マリアの聖性について強調することで、真実の信仰はキリスト教以外に存在し得ないことを示し、ムスリムに改宗を促す内容となっている。とりわけイエスやマリアは、クルアーンのなかでも度々言及される人物であり、ムスリムにとっても崇敬対象であったため、「反クルアーン」文学の主要な論題の一つでもあった。イスラーム・

- 
- (3) M. García-Arenal and G.A. Wieggers, “The Iberian Qur’an and the Qur’an in Iberia: A Survey” in *The Iberian Qur’an: From the Middle Ages to Modern Times*, eds., M. García-Arenal and G. Wieggers, Berlin, Boston: De Gruyter, 2022, pp. 11-12.
- (4) 押尾高志「カスティーリャ語で書かれたイスラーム法学書から見る中近世イベリア半島ムスリムの生活規範」『スペイン史研究』38号、2024年、18-28頁。
- (5) アンドレスの『混乱』のカスティーリャ語版印刷本は、大英図書館とアメリカ議会図書館、クエリニアーナ図書館(イタリア)に各1点ずつ現存している。Ruiz GarcíaとGarcía-Mongeによる2003年の校訂版が底本としたのは、大英図書館のマイクロフィルム版である。その後、資料のデジタル化が進んだことで、アメリカ議会図書館所蔵の印刷本は、現在下記URLから閲覧可能である(<https://lccn.loc.gov/47043529>)。本稿では、2003年の校訂版を主に依拠しつつ、適宜アメリカ議会図書館所蔵版も参照した。Juan Andrés, *Confusión o confutación de la secta mahomética y del Alcorán*, eds. Ruiz García and M.I. García-Monge, Mérida: Editora Regional de Extremadura, 2003.

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

キリスト教間の共通項であり、改宗促進の媒介でもあったイエスの描写について分析することで、両信仰の境界に立つ改宗者が、かつての同胞を説得するためにいかなる論理を展開したのかの一端を明らかにすることを旨とする。

## 1. 改宗者ファン・アンドレス

『混乱』の著者、ファン・アンドレスの人生については、著作の序文がほぼ唯一の情報源となる<sup>(6)</sup>。それによれば、彼はイベリア半島東部バレンシアのシャティバで、アブドゥッラーという名前のアルファキーの息子として生まれ、父親からアルファキーの地位を受け継いだ。なお、改宗以前のムスリム名は判明していないが、彼のアラビア語およびカステイリャ語能力や、クルアーンをはじめとする各聖典に加えて、地理や歴史、政治状況などに関する知識は、『混乱』中の記述や引用からもうかがい知ることができる<sup>(7)</sup>。

1487年の聖母の被昇天の祝祭で、バレンシアの大聖堂でドミニコ会士が執り行ったミサに参加したことによって、アンドレスの人生は大きな転機を迎えた。このミサののち、彼はカトリック信仰への改宗を決意し、洗礼の際に自らの洗礼名を使徒ヨハネとアンドレからとって、キリスト教徒ファン・アンドレスへと回心した<sup>(8)</sup>。キリスト教徒となったアンドレスはバレンシアで、多くのムスリムを改宗させたという。

その後、1492年にはカトリック両王により征服後のグラナダへ召喚され、タラベーラと、のちにバルセローナ司教を務める異端審問官のマル

---

(6) 『混乱』と同じ版元から同年に出版された算術書の序文の記述から、Szpiechはアンドレスが同書の著者と同一人物であると推測している。R. Szpiech, "A Witness of Their Own Nation: on the Influence of Juan Andrés," in *After conversion: Iberia and the emergence of Modernity*, ed. M. García-Arenal, Leiden-Boston: Brill, 2016, pp. 176-179.

(7) Z. Zuwiyya, "Juan Andrés," in *Christian Muslim Relations: a Bibliographical History, Western Europe (1500-1600)*, eds., D. Thomas et al., vol. 6, Leiden: Brill, 2015, pp. 79-84; Andrés, *Confusión*, pp. 155, 218.

ティン・ガルシア(1441-1521)のもとでアラビア語を用いたムスリムへの宣教政策に従事している。タラベーラが主導した征服直後のグラナダの対ムスリム改宗事業では、司祭によるアラビア語を用いた宣教活動に重点が置かれ、議論と説得によるムスリムの自主的改宗の促進が目指された。そのため、布教の手段としてのアラビア語を学ぶ教本として、カテキズム付きのアラビア語文法書『アラビア語を簡略に知る術 *Arte para ligeramente saber la lengua árábigo* (以下、簡略に知る術)』や、アラビア語とカスティーリャ語の二言語辞典『カスティーリャ文字表記のアラビア語語彙 *Vocabulista árábigo en letra castellana* (以下、語彙集)』がペドロ・デ・アルカラ(ca. 1455 - ca. 1508)によって著され、両書ともに1505年にグラナダにて出版された<sup>(9)</sup>。両作品では、『混乱』に先行してアラビア文字のラテン文字転写が行われたほか、『簡略に知る術』ではごく限定的にはあるが木版活字によるアラビア文字の印刷も行われた。同書では、グラナダ・ムスリム住民の理解可能なアラビア語の習得に主眼が置かれていたため、古典アラビア語(フスハー)ではなく、グラナダの口語アラビア語の文法について、ラテン語文法を援用した説明がなされ、『語彙集』でも同様の目的から、同地の口語アラビア語が収められている<sup>(10)</sup>。

アラビア語を用いることを前提としたタラベーラの改宗事業にとって、学術的知識とアラビア語能力を併せ持つ元アルファキーのアンドレスは有用な人材であっただろう。実際、『混乱』の記述では、「説教と神

(8) Szpiechは、アンドレスが自らの回心体験をパウロのそれになぞらえており、従来イスラーム的文脈では、福音書を歪曲した「主犯」と目されがちであった使徒パウロが『混乱』のなかではむしろ肯定的に描かれている点を指摘している。R. Szpiech, "Preaching Paul to the Moriscos in the *Confusión o confutación de la secta Mahomética y del Alcorán* (1515) by Juan Andrés," *La Corónica*, vol. 41 (1), 2012, pp. 317-343.

(9) O. Zwartjes, "Pedro de Alcalá," in *Christian Muslim Relations*, pp. 73-78.

(10) ヨーハン・フュック(井村行子訳)『アラブ・イスラム研究誌 20世紀初頭までのヨーロッパにおける』法政大学出版局、2002年、28-32頁。

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

の御意志によって、無数のモーロ人たちがムハンマドを捨て、キリストを信仰するようになった」とその成果が誇示されている<sup>(11)</sup>。アンドレスは、1504年かそれ以前にカトリック両王によって聖堂参事会員に任命されたようだが、それ以上の地位を得ることができたかどうかについては定かではない。改宗事業の主導権が1499年にシスネロスへと移ったこと、さらに1505年にはタラベーラが異端の疑いがかけられ投獄されたことも影響して、これ以上の地位を得ることはできなかったと推測される<sup>(12)</sup>。

その後、イサベルは、アンドレスをグラナダからアラゴン連合王国へと帰還させ、同地での改宗事業に従事するように指示したが、フェルナンドは自領アラゴンでのムデハル住民の改宗事業に熱心ではなかったため、アンドレスは著述活動を通じた司牧活動を行う道を選び、アラゴンの異端審問官であったマルティン・ガルシアを頼ることになる。そして、アンドレスは同地のムデハルへ説教を行う際の手助けになるようにクルアーンとスンナ関連書を翻訳したと『混乱』のなかで述べているが、これらは現存していない。そののち、マルティン・ガルシアの依頼によって『混乱』を執筆した。同書は、当時の慣習にしたがって、教会の高位聖職者たちによる検閲と修正を受けたことが序文に記されている<sup>(13)</sup>。『混乱』執筆後の彼の足取りについては、1516年にグラナダの聖堂参事会員として文書記録に同名の人物が登場するのが最後である<sup>(14)</sup>。

『混乱』の発行部数や当時の読者への受容、反響については確かな記録は存在しないが、後述するように17世紀までヨーロッパの主要言語に訳出され続けていたことから、その普及具合がうかがえる。それにもかかわらず、著者の周辺情報が著しく乏しいことから、彼の元アルファキーという経歴も含めて、その実像が研究者によって議論されてきた。アルハミーア文献研究をはじめムデハル・モリスコ研究を牽引してきた

---

(11) Andrés, *Confusión*, p. 90.

(12) Zuwiyya, “Juan Andrés,” p. 80.

(13) Andrés, *Confusión*, pp. 90–93.

(14) G.A. Wiegiers, “Moriscos and Arabic Studies in Europe,” *Al-Qanṭara*, vol. 31, no. 2, 2010, p. 589.

Wieggersは、『混乱』の構成や内容が、基本的には中世後期以降のキリスト教徒知識人による反イスラーム的作品をなぞっていること、『混乱』の序文以外にファン・アンドレス自身に関する情報がほとんど存在しないことから、その実在性についての判断には慎重を要すると主張している。ただし、Wieggersも、『混乱』ではクルアーンやハディース(ムハンマドの言行録)の記述をもとにイスラーム批判が展開され、クルアーンの章句をはじめとしてアラビア語文のラテン文字転写とカスティーリャ語への訳出が行われていることから、その執筆過程にアラビア語話者のムデハル(あるいはモリスコ)の協力者が関わっていたこと自体は否定していない<sup>(15)</sup>。

一方で、ムデハル・モリスコ由来のラテン文字表記カスティーリャ語訳クルアーンの研究で知られるLópez Morillasは、『混乱』の中で示されるアンドレスのクルアーン解釈学の知識や、15世紀セゴビアのムデハル法学者イーサー・ブン・ジャービルの著作である『スンナ概要 我々の聖法とスンナにおける戒律と義務の要諦 *Breviario çunní. Suma de los principales mandamientos y devedamientos de nuestra Santa Ley y Çunna* (以下、スンナ概要)』と『混乱』とを比較し、両書の文中に参照元として登場するイスラーム的著作が類似していることなどから、アンドレスは実在の人物であるとみなしている<sup>(16)</sup>。また、『混乱』を中心に中近世ヨーロッパの宗教論争文学研究を進めるSzpiechは、同書に含まれる預言者ムハンマドや教友たちにまつわる歴史的逸話や、宗教的文献に関する知識について、アルファキーとして教育を受けた人物であれば、通常は犯さないような間違いや議論の混乱が見られる点を指摘する。それゆえ、アンドレスがクルアーンを全篇にわたって訳出したという『混乱』の証言には疑問を呈し、マルティン・ガルシアらと関わりのあったファン・アンドレスという人物の存在自体は認めつつも、その人

(15) G.A. Wieggers, "Review of *Confusión o confutación de la secta Mahoméctica y del Alcorán* (E. Ruiz García and M<sup>a</sup> I. García-Monge)," *Aljamía*, vol. 16, 2004, pp. 254-260.

(16) C. López Morillas, *El corán de Toledo: edición y estudio del manuscrito 235 de la Biblioteca de Castilla-la Mancha*, Gijón: Trea, 2011, pp. 43-44.

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

物像には多分に虚構が含まれている可能性を提示した<sup>(17)</sup>。

## 2. 『混乱』の構成と内容

『混乱』は1515年にバレンシアにてカステイーリャ語で出版された、72葉の初期活版印刷物(インキュナブラ)で、この版には文章ばかりではなく、「聖霊降臨」、「栄光のキリスト」、「聖ドミニコ修道会の称賛式」、「柱上の聖母」、「イエス・キリストの磔刑」を表した5点の挿絵も含まれている。これらの挿絵は、後に刊行されたイタリア語版などでは省略されており、原本であるカステイーリャ語版が視覚的効果も含めて実際の改宗事業に用いられることを想定した作りであったことがうかがえる。

本書は、16-17世紀の間に、イタリア語版(1537年、1540年、1541年、1545年、1597年)、フランス語版(1574年)、オランダ語版(1580年、1651年)、ラテン語版(1594年、1600-1656年)、ドイツ語版(1598年、1647年、1685年)、英語版(1652)とヨーロッパ各国の言語に翻訳され出版された<sup>(18)</sup>。現存するカステイーリャ語版の『混乱』の印刷本は3点と少ないが、上記の通り多様な言語での出版歴を考慮すると、本書が広くヨーロッパに普及していたことは確かであろう。

全体を通して『混乱』では、ムスリムに対してイスラーム信仰の要であるクルアーンの記述内容への疑義や、ムハンマドに対するイエスの預言者としての優越性を提示し、キリスト教への改宗を促すほか、キリスト教教義に対するイスラーム側からの攻撃にも反論が行われる。まず、序文では、預言者ムハンマドの誕生とイスラームの誕生に関する著者の知識が披露され、本書の目的がイスラームの矛盾を立証し、「無知なモーロ人たちが、自民族su naciónの証人によって」説得され、キリスト教への改宗へと導かれるようにすることであると表明される<sup>(19)</sup>。ここ

---

(17) Szpiech, "A Witness of Their Own Nation," pp. 180-185.

(18) Ruiz García and García-Monge, "Estudio Preliminar," in Andres, *Confusión*, pp. 54-56.

からは、元ムスリム、それもアルファキーであった改宗者による説得は改宗促進に有効であるという当時の認識が読み取れる。

続く1章ではムハンマドの生涯が、2章と3章ではクルアーンとスナナ(ハディース)に見られるイスラームの本質や基礎について取り扱われ、これ以降の章で論証および反駁していくイスラーム信仰の基礎的知識が読者に提示される。

4章と5章では、イスラーム信仰の法源たるクルアーンやスナナに対する反駁が行われる。アンドレスは、それらの誤謬を糾弾することで、クルアーンが啓典と呼ぶに値しないことを読者に示す手法を採用している。6章では、ユダヤ教とイスラームとを比較して、両信仰を分かち諸要素、たとえば断食の時期、礼拝の方角などを説明したのち、ムハンマドの昇天(ミーラージュ)についての初期ムスリムたち間の意見の不一致といった議論を示すことで、ムハンマドの預言者としてのイメージを毀損することを目指している。特に、ムハンマドが、イスラームを創唱する以前に偶像崇拜を行っていたことや、礼拝でミスを犯した点などを責めることで、彼が完全な人間ではないことを指摘する。

7章、8章でも引き続き、ムハンマドをイエスと対比し、ただの人間であることを示すために、複数の妻を娶ったことや、ムハンマドが行った最大の奇跡とされるミーラージュの目撃者がいないことに対する批判を展開する。婚姻については、9章でもイスラーム信仰における天国の描写とともに取り扱われ、そこで善行への報いとして約束される処女や金銀などが即物的であることや、キリスト教倫理に反するものであることに厳しく攻撃を加えている。また、ムスリム男性が受け取る褒賞についての詳述がなされる一方で、女性が受け取るべき褒賞についての言及がないことも批判している。後述のとおり、12章の後の「覚え書 Nota」でも、ムハンマドの婚姻に対する非難が追記されており、イスラーム信仰における女性の扱いの「不当さ」への言及が各所でなされる点は興味深い。

10章では、主にクルアーンの各章句間の矛盾について、イスラーム諸

---

(19) Andrés, *Confusión*, p. 92.

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

学の概念であるナスフ理論<sup>(20)</sup>などにも言及することで元アルファキーとしての見識を誇示しつつ、非難を加える。また、ヘブライ語聖書と新約聖書を引き継ぐ啓典であるはずのクルアーンが、内容的に前述の二書と合致しない点や、脈絡なく雑多な逸話が挿入される点を批判したうえで、ムハンマドが起こしたと言われる奇跡には目撃者が一人もいないことから、それを「虚言 burla」と断じている。

11章と12章は、これまでの各章とは少し異なる内容が展開される。まず、11章では、ここまで批判対象としてきたクルアーンやスンナの記述を逆用して、キリスト教の信仰の正しさや優越性を証明する論を展開する。特に、イエス・キリストの預言者性や三位一体説、そして聖母マリアの無原罪の御宿りに関する記述を取り上げて、それらがクルアーンでも保証されていることを主張する。12章は、クルアーンやイスラーム信仰そのものではなく、イスラーム初期史を扱う章となっている。ムハンマド存命中から死後の正統カリフ時代にかけてのイスラームの急速な勢威拡大について、それらが決して奇跡ではないという批判を展開する。

12章ののち、「覚え書」と題された最後の節では、ムハンマドの後継者の地位をめぐるムスリムたちが相争い殺し合ったという逸話と、イエスの使徒たちがイエスの死後も争うことなく平和裡に伝道を続け最終的に殉教したこととを比較し、「師」としてのイエスのムハンマドに対する優越性を主張する。また、最後にムハンマドと幼少のアーイシャとの婚姻に対する批判を付け加えたのち、締めくくりに自分がクルアーンを論駁したのは、悪意からではなく、その能力を神が自らに授けてくれ

---

(20) ナスフnaskhは、廃棄、解消を意味するイスラーム法源学やクルアーン学などの理論。クルアーンは、神からムハンマドへ二十数年間にわたって下された啓示の集成であり、節同士で相反する記述がみられる箇所も存在するため、この矛盾を解決するため、一方の記述(新しい啓示)によって、もう一方が取り消されたとするのである。なお『混乱』の10章でも取り上げられている酒の禁止に関する規定は、このナスフの典型例としてイスラーム法源学で紹介されてきた古典的な論点である。下村佳州紀「クルアーンに残された古い規定—「廃棄」か「忘却」か」松山洋平編『クルアーン入門』作品社、2018年、237-239頁。

たからだと弁明し、自らをキリスト教信仰へと導いた神への感謝を記して筆をおいている。

ここまで概観した通り、『混乱』の記述はムスリム民衆を説得の相手として想定しているため、彼らが信仰の拠り所とするムハンマドの預言者性や、クルアーンの聖典性への疑義を多岐にわたって提示する。それと並行して先行する諸預言者に連なるイエスの血統の正統性や神聖さや、イエス本人およびその使徒による奇跡の顕現を強調し、ムハンマドの血統の不確かさやその奇跡の目撃者不在、ムハンマド死後の教友たちの争いと対比させて、唯一の信仰であるキリスト教への改宗をムスリム民衆に促す論を展開するのである。

アンドレスは持論の出典として、クルアーンやハディース集といったイスラーム法学の法源に加えて、イブン・ヒシャームの『預言者伝』、タバリーの『諸預言者と諸王の歴史』などのイスラームの古典作品をも参照する。引用の際には、アラビア語原文のラテン文字転写文とカステイリャ語訳の両方を読者に提示しており、それらは概ね正確である。しかし、しばしば文章が省略されたり、ラテン文字転写文とアラビア語原文とで語や動詞の表記が異なっていたりするケースが見られる。これについて、Szpiechはアンドレスのラテン文字転写文や翻訳は書かれたテキストだけではなく、口頭での発音や記憶を頼りにしていた可能性を指摘している。また、アラビア語の転写が行われた理由については、非識字者のムスリム民衆に対して声に出して読み聞かせることが想定された作品だったからであろうと推測している<sup>(21)</sup>。クルアーンの記述を用いて、ムスリムの考えを論難するという議論様式自体は、中世期から見られるものであり、中近世ヨーロッパのクルアーン翻訳研究を専門とするStarczewskaが、アンドレスの『混乱』と中世の反イスラーム論争文学作品がその参照文献について酷似している点を指摘している<sup>(22)</sup>。

(21) R. Szpiech, "Sounding the Qur'an: The Rhetoric of Transliteration in the Antialcoranes," in *The Iberian Qur'an*, pp. 293-295.

(22) K.K. Starczewska, "“No es esto sino hystorias de los antiguos”: entre la narración medieval y la de la primera edad moderna en “Confusión” de Juan Andrés," *Medievalia*, vol. 18, no. 1, 2015, pp. 217-227.

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

『混乱』は「反クルアーン」文学の中でも最初期の作品であり、著者アンドレスの出自が元アルファキーであることから、その独自性が強調されがちであるが、その内容や論理展開はキリスト教文学の伝統に根ざしているのである。

### 3. 反イスラーム言説と『混乱』の位置付け

ファン・アンドレスの『混乱』は、キリスト教世界におけるイスラーム世界やその信仰全体に対する否定的なイメージの形成に寄与してきた反イスラーム的キリスト教文学の系譜に位置付けることができる。

イベリア半島では、9世紀末のアストゥリアス王国の年代記のなかにサラセン人、すなわちムスリムが登場しはじめ、彼らの存在は終末論と関連づけられた。それらの記述はごく少数の伝聞史料に基づいており、ムハンマドやイスラームに関する記述の正確性など望むべくもなかったが、のちの反イスラーム言説の基礎となるいくつかの要素の萌芽がすでに見られた。すなわち、ムハンマドがアブラハムの庶子の系譜(女奴隷ハガルの血統)であり、正統性が欠如していること、ムハンマドには神的な預言能力が備わっていないという2点である。また、ムハンマドやムスリムに対する否定的イメージ、好色な偽預言者と彼の粗野な信奉者たちという定型的な偏見もこの時期に形成され、定着していく。当時のキリスト教徒たちは、政治的社会的な対立と宗教的対立とを織り交ぜて、ムハンマドの人物像やムスリムに対する軽蔑的解釈とともに、イスラームとの対決的な姿勢を露にしていた<sup>(23)</sup>。

中世盛期から後期にかけて、反イスラーム論争は、クルアーンやアラビア語で書かれた宗教文献のラテン語訳集成である『トレード集成 *Corpus Toletanum* (クリュニー集成)』や、チュニスでムスリムへの説教活動を行ったドミニコ会士ラモン・マルティ(1230-1284年)の著作、異教徒の改宗を目的としてラテン語やカタルーニャ語の著作をものしたラモン・リュイ(1235-1315年)の貢献によって、その質的水準が大きく向上し

---

(23) Ruiz García and García-Monge, “Estudio Preliminar,” pp. 14-17.

た<sup>(24)</sup>。さらにラテン語訳クルアーンの登場に加え、1386年にはアラゴン王ベラ4世に口語訳(カタルーニャ語訳)のクルアーンが献上されたほか、神学者ファン・デ・セゴビア(ca. 1395-1458)が1. で言及した『スンナ概要』の著者の助力を得て編纂したアラビア語・カステイーリャ語・ラテン語三言語表記のクルアーンがこの時期には現れている<sup>(25)</sup>。

残念ながら、これらの口語訳クルアーンの写本は現存していないが、アラゴンとカステイーリャでは14世紀末以降に、カタルーニャ語では『モーロ人の慣習と律法の書 *Llibre de la çuna e xara dels Moros*』、カステイーリャ語では『モーロ人の律法 *Leyes de los moros*』といったイスラーム法学書の翻訳や抄訳が次々と編纂された。これらは、キリスト教支配下でアラビア語を失いつつあったムデハルの需要に応えるためだけではなく、キリスト教徒君主の支配の道具としても用いられた<sup>(26)</sup>。また、前述の『スンナ概要』は、16世紀前半に半島全域でイスラーム信仰が禁止されたのちも、イスラーム信仰を秘密裏に実践する「隠れムスリム」的性格をもつモリスコたちによって、アルハミーア(アラビア文字表記スペイン語諸語史料)や、ラテン文字表記スペイン語写本の形で流通し続けた。15世紀におけるキリスト教からイスラームへのアプローチには、前述のファン・デ・セゴビアに代表されるムスリムとの対話を重視し、平和的な改宗を目指す方法と、フランシスコ会士アロンソ・デ・エスピナ(1495年頃没)に代表される異教徒に対する攻撃的な伝統的枠組みを踏襲する対決的な方法の二種類に分類される<sup>(27)</sup>。

1492年のグラナダ陥落は、イベリア半島の全ムスリムがキリスト教君主と教会法の支配下に置かれたことを意味し、イスラームとキリスト教の関係は新しい段階へと移行していく。前述のタラベーラが採用したア

(24) ジュゼップ・エルナンド(阿部俊大訳)「西欧中世における反イスラーム論：極めて困難な相互理解：ラモン・マルティの事例を中心に(上)」『言語文化研究』33号、149-151頁。

(25) García-Arenal and Wieggers, “A Survey,” pp. 2-3.

(26) 押尾「カステイーリャ語で書かれたイスラーム法学書」2-4頁。

(27) Ruiz García and García-Monge, “Estudio Preliminar,” pp. 20-24；エルナンド「西欧中世における反イスラーム論」152-153頁。

クルアーンの翻訳と「反クルアーン Antialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

ラビア語や翻訳を用いた宣教活動は、当然ながらアラビア語知識を持つ聖職者を必要とした。そのため、領内に多くのムデハル住民を抱え、彼らに対する宣教活動の伝統を持つアラゴン連合王国出身のマルティン・ガルシアやファン・アンドレスらのようなアラビア語能力を持つ聖職者がグラナダでの宣教活動にも参加することになった。

タラベラの福音化政策の精神は、1502年の強制改宗令布告の後も、クルアーンやその他のアラビア語著作やその翻訳を用いてイスラームを論駁し、最終的にムスリムを改宗へと導こうとする「反クルアーン」文学へと引き継がれた。ただしSotoとStarczewskaが指摘するように、タラベラはイスラームに代わるべきキリスト教教義をムスリムへ浸透させるためにアラビア語を用いたのに対し、マルティン・ガルシア、ファン・アンドレスおよび他の「反クルアーン」文学の著者たちは、布教のみならず、反イスラーム論争の道具としても用いた点が大きく異なる<sup>(28)</sup>。

「反クルアーン」文学に分類される主要な著作は、年代順にファン・アンドレス著『混乱』(1515年、バレンシア)、マルティン・ガルシア著(A・オリバン編)『マルティン・ガルシア説教集 *Sermones eminentissimi ... Martini Garsie*』(1520年、サラゴーサ)、ジョアン・マルティ・デ・フィゲローラ著『ムハンマド信奉者の宗派に対する信仰の光 *Lumbre de fe contra la secta mahometana*』(1521年、未刊行)<sup>(29)</sup>、ベルナルド・ペレス・デ・チンチョン著『反クルアーン *Antialcorano*』(1532年、バレンシア)、ロペ・デ・オブレゴン著『クルアーンおよびムハンマド信奉者の宗派に対する論駁 *Confutación del alcorán y secta mahometana*』(1555年、グラナダ)である。

マルティン・ガルシアは、そのアラビア語能力を買われてグラナダで

---

(28) T. Soto and K.K. Starczewska, “Authority, Philology and Conversion under the Aegis of Martín García,” in *After Conversion*, pp. 205–206.

(29) 同著作については、2024年にRuiz GarcíaとBernabé Ponsによって、フィゲローラの手稿に含まれるクルアーンのアラビア語テキストやラテン文字転写文、さらにイスラーム信仰やその儀礼を表象する図像を含む校訂版が出版された。E. Ruiz García and L. F. Bernabé Pons, *Joan Martí de Figuerola: Works (1519–1521)*, Leiden: Brill, vols. 2, 2024.

の改宗事業に携わったほか、アラゴンの異端審問官やバルセローナ司教をつとめ、アンドレスやフィゲローラを支援した人物であった。クルアーン(翻訳含む)を活用して対ムスリムの改宗促進や説教を行うというマルティン・ガルシアの方針には、アンドレスのようにアラビア語能力とイスラーム知識をもつ元アルファキーの改宗者の存在が必要不可欠であり、現にアンドレスはマルティン・ガルシアにクルアーンやスンナの翻訳を提供し、彼の事業を下支えしていた。フィゲローラは著作『信仰の光』の中で、ファン・アンドレスと『反駁』についても言及しているが、フィゲローラを支えた協力者もまた、テルエル出身の元アルファキーの改宗者であった<sup>(30)</sup>。

アンドレスとフィゲローラは、1526年のアラゴンでのムスリムの強制改宗以前に活動していたが、それに続くベルナルド・ペレス・デ・チンチョンとオブレゴンの2人は、改宗済みのモリスコへの布教に従事した点が大きく異なるといえよう。両者は、いずれもアンドレスの著作を手本にし、『混乱』の内容を踏襲しながら、クルアーン反駁の重要性を引き続き強調している。特にオブレゴンは、自著『論駁』のなかで、アンドレスの『混乱』にあるクルアーンのカスティーリャ語訳文だけでなく、そのラテン文字転写文も多く引用している<sup>(31)</sup>。

これらの「反クルアーン」文学の諸作品が、イベリア半島で生じたことは決して偶然ではない。モリスコ研究の泰斗García-Arenalは、半島では16世紀前半に強制改宗令が發布されるまで、合法的なムスリム共同体が身近に存在していたことや、ムスリムあるいは改宗者の「協力者」を通じたイスラーム的知識の取得が他のヨーロッパ諸国に比べて容易であったことが影響していると指摘する<sup>(32)</sup>。14世紀末以来、キリスト教聖職者の展開する反イスラーム言説の情報源としては、これらの「協力者」の存在が大きく、「反クルアーン」文学の諸作品もまた、同様にイスラーム知識を持つモリスコの助力によってクルアーンのカスティーリャ語訳

(30) R. Tottoli, “Quoting the Original: Figuerola’s *Lumbre de fe* and the Arabic Qur’an,” in *The Iberian Qur’an*, pp. 344–346.

(31) Szpiech, “Sounding the Qur’an,” pp. 308–311.

(32) García-Arenal and Wiegers, “A Survey,” p. 4.

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

や、ときにはアラビア語原文を含む実用性の高い著作となった。しかし、クルアーンの引用や翻訳が大量に含まれていたことを理由として、すべての「反クルアーン」文学の著作は、1559年の禁書目録に収録された。禁書に至った原因は、イスラームを論駁する目的で書かれた著作であるにもかかわらず、カステイーリャ語話者のモリスコたちの間でこれらの印刷本が買い求められ、クルアーンの引用部分や翻訳箇所がクルアーンの代用品として用いられるという本末転倒な状況が発生したためである<sup>(33)</sup>。かつてクルアーンを用いて、キリスト教の正統性を証明しようという試みのために行われた翻訳活動は、思わぬ意趣返しに見舞われることになったのである。

#### 4. 『混乱』にみるイエス像

ここでは、『混乱』の第11章において行われる、クルアーンを用いたキリスト教護教論に着目する。2. で指摘した通り、第11章ではクルアーンのなかに、最も優れた預言者としてのイエス、聖母マリアの無限罪の御宿り、受胎告知、イエスの使徒たちの起こした奇跡に関する記述が含まれることを論拠として、キリスト教信仰の真正性が主張される。そのために、章の始まりで以下のように、クルアーンの章句を取り上げている。

クルアーンの第1書第1章[Q2:2]は、次のように述べている：*Delique al quitebu le raybe fihi huden lilmuttaquin*。これは「聖書、すなわち新旧約聖書は、正しい者たちの法であり、道である」<sup>(34)</sup>という意味である。また、同章は次のようにも述べる：*gualacad atenne hice bumi Mariame alquitebe gua ay adnehu birohi el coduz*。こ

(33) M. García-Arenal, “The Inquisition and the Search for Qur’an,” in *The Iberian Qur’an*, pp. 261, 275.

(34) 日本語訳の該当箇所は「これこそ疑う余地なき啓典である。これには畏れかしこむ人々のためのお導きがある」である。以下、クルアーンの日本語訳は、藤本勝次ほか編訳『コーラン I・II』中央公論新社、2009年に拠る。

れは「われわれ神は、イエス・キリストに聖書を与え、聖霊をもって彼を助けた」<sup>(35)</sup>という意味である。同様の言葉が同じ章の先の部分でも述べられている。第1書第2章 [Q3:3] には次のように述べられている：*Nezele ha leyque alquitebe bilhaquí gua anzele ataurate gua lingilemi cablo hudenlineci gua anzele al forcan*。これは「神はムハンマドにクルアーンを下し、人々の律法であり、道であるトーラー [ヘブライ語聖書] と福音書を下した」という意味である<sup>(36)</sup>。(アラビア文字転写部分の斜字体への変換、および下線挿入は筆者による)

イスラームの教義である六信には、ヘブライ語聖書(旧約聖書)や福音書がクルアーンと同じく唯一神が使徒であるモーセやイエスに下した啓示であることを信じることが含まれているが、そもそも上記の翻訳には著者アンドレスによる恣意的な意識や言い換えが含まれている。例えば、下線部「聖書、すなわち新旧約聖書」は、*la Biblia, a saber es, el Testamento Viejo y Nuevo*とカステイリャ語に訳出されているが、同箇所に対応するラテン文字の転写文の語は「*al quitebu*」、すなわち啓典*al-kitāb*の語のみであり、ヘブライ語聖書や福音書ではなくクルアーンを指すと通常解釈される。また、下線部「イエス・キリストに聖書を与え」にも、「*alquitebe*」という語が含まれているが、アラビア語原文の該当箇所では「明らかなしるし*al-bayyanāt*」の語が用いられており、「しるし」は奇跡を指すと解釈される。このような恣意的ともとれる読み替えからは、説得対象であるムスリム民衆には、クルアーンの文言に関する知識が不足しているという、著者アンドレスのかつての同胞に対する認識が透けて見える。また、Szpiechが指摘する通り、転写部分は書かれたテキストとしてのクルアーンを参照したのではなく、著者の記憶を元に行われた可能性も考えられる<sup>(37)</sup>。

(35) 日本語訳の該当箇所は以下の通り。「われらは、マリヤの子イエスに明らかなしるしを受け、聖霊によってこれを強化した」。

(36) Andrés, *Confusión*, p. 211.

(37) Szpiech, "Sounding the Qur'an," p. 295.

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

11章ではこののち、イエスと聖母マリアの存在がいかにクルアーンの中で記述され、そして尊ばれているのかが論じられる。イエスや聖母マリアはムスリムにとっても崇敬対象であり、クルアーンではそれぞれイエスは「イーサー」、聖母マリアは「マルヤム」の名前で繰り返し言及される。イエスの母であるマリアについては、クルアーン中にも、受胎告知や無原罪の御宿りに関するエピソードが含まれており、尊敬されるべき女性として認識されている<sup>(38)</sup>。それゆえ、『混乱』においても、クルアーンの該当部分を翻訳・引用し提示することで、イエスとマリアだけが「悪魔の誘惑から完全に守られた者である」と、聞き手であるムスリムに向けて確認している<sup>(39)</sup>。また、16世紀初頭のムスリムたちがイエスの生誕祭、クリスマスを祝う様子も以下のように残されている。

イエス・キリスト、われらの主の栄光に満ちた誕生については、  
[クルアーンの] 第3書第1章、すなわち受胎告知とその神秘と誕生の全てが述べられる章で、奇跡的であり、喜びに満ちた誕生であることが言及される。モーロ人たちは、このイエス・キリストの誕生日をアルミリド *Almilid* [アル・ミーラード *al milād*] と呼び、世界の至る所でその夜に盛大な祭りを行う。シャティバのモレリーア [ムスリム街区] では、この日には大盤振る舞いが行われ、舞踊や音楽が催される<sup>(40)</sup>。

上記は、著者アンドレスが、『混乱』のなかで自身の出身地であるシャティバのムスリム共同体について語る珍しい描写の一つである。アンダルスやマグリブ(北アフリカ)では、イスラームにおいて重要な二つの祝祭である断食明けの祭りと、犠牲祭に加えて、イエス生誕祭や割礼祭、洗礼者ヨハネの生誕祭が、キリスト教徒だけでなくムスリムによっても

(38) 袴田玲・P. ブース「共通の崇敬対象としてのマリアー東方キリスト教とイスラーム」佐野東生・久松英二編『キリスト教とイスラーム・対立から共生へ』晃洋書房、2024年、149-169頁。

(39) Andrés, *Confusión*, p. 212.

(40) Andrés, *Confusión*, p. 213.

祝われていた。また、13世紀以降は、これらに加えて預言者ムハンマドの生誕祭(マウリド)が祝われ始め、同祝祭は16世紀以降も隠れイスラーム信仰を続けるモリスコの間で秘密裏に維持された<sup>(41)</sup>。『混乱』では、ムスリムたちがイエスを崇敬している論拠として、イエス生誕祭が示されるが、これはキリスト教支配下でもムデハルたちが従前の信仰生活を実践しえたことを裏付けている。このほか、イエス誕生の場面については、聖書正典で語られるベツレヘムでの誕生ではなく、クルアーンや聖書外典で語られるナツメヤシの下での誕生のエピソードが採用され紹介されている点は興味深い。

先に述べた通りイエスが神の使徒であり、神が彼に福音を下したことを信じることは、ムスリムの義務である六信に含まれる。しかし、三位一体の教義や、イエスを「神の子」と呼ぶことについては、イスラームは明確に否定的であり、クルアーンにもそれは明記されている<sup>(42)</sup>。それゆえ、クルアーンでは「メシア」や「マリアの子」とイエスが呼ばれることはあっても、「神の子」と呼ばれることはない。この点は、モリスコのなかでも「隠れムスリム」的性格を持ち続けた者たちの間でも共有されており、彼らが残したアルハミーア文献にも、イエスの神性が否定され、むしろその人間性を強調する記述が残されている<sup>(43)</sup>。それにもかかわらず『混乱』では、クルアーンのなかにイエスが「神の子」と暗示されている記述を見出そうとする論が展開される。

(41) 佐藤健太郎「ヤンナイルとアンサラ—西方イスラーム世界の祭」『歴史と地理』599号、2006年、1-17頁；M. García-Arenal, “Shurafā in the Last Years of Al-Andalus and in the Morisco Period: Laylat Al-Mawlid and Genealogies of the Prophet Muḥammad,” in *Sayyids and Sharifs in Muslim Societies: The Living Links to the Prophet*, ed., K. Morimoto, London: Routledge, 2012, pp. 161-185.

(42) 野元晋「イスラームにおけるイエス・キリスト——クルアーンから、そして後代の二つの視点から」浅見雅一・野々瀬浩司編『キリスト教と寛容中近世の日本とヨーロッパ』慶應義塾大学出版会、2019年、239-258頁。

(43) L. López-Baralt, “The Moriscos,” in *The Literature of Al-Andalus*, eds., M. R. Menocal et al., Cambridge: Cambridge University Press, 2006, p. 477.

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

したがってイエス・キリストが神の言葉であり、神の聖霊であることを証明することによって、彼が神の子であり、真の神であることも証明される。クルアーンの第1書第3章において、アラビア語で以下のように述べられる：*Mel mace ho hicebun mariama ille raçolo Allahi gua quelime tuhu alcaha ile Mariame gua rohum minhu*。これは、メシアであるマリアの子イエス・キリストは、マリアに送られた神の言葉であり、神の霊にして神の使徒にほかならない、という意味である。この言葉を通して、汝モーロ人もまた理解すべきである。[クルアーンこそが] イエス・キリストが神であり、人であることを示しているのである<sup>(44)</sup>。

上記はクルアーン第4章171節に該当する記述であり、「イエスが神の使徒でありその言葉」であると、アラビア語原文にも記されている。しかし、この後に続く「神とその使徒を信ぜよ。けっして三者などと言ってはならない〔中略〕神に子どもがあってよいものか」<sup>(45)</sup>という三位一体に対する明確な否定の文言を省略しているのは、意図的なものであろう。同節は、イスラームにおける三位一体の否定の論拠として参照されるもっとも有名な節の一つであり、このような小手先の改変を行ったとしても、少なくともムスリムの知識階級には通用する可能性は低いと考えられる。

『混乱』の11章の記述は、それまでの章で批判対象としてきたクルアーンの記述を逆用しキリスト教信仰の真正性を主張しようとするあまり、クルアーンの引用について牽強付会に陥っている箇所が見受けられる。これについては、論駁的文体に特有のレトリックに合わせたことで著者自身の本来の知識が歪められている可能性と、『混乱』が出版にあたって高位聖職者の検閲を受けた影響である可能性などが指摘できよう。

---

(44) Andrés, *Confusión*, p. 217.

(45) このほか5章17節や73-75節でも、イエスを神とみなすことへの禁止や、イエスはマリアの子どもにして神の使徒に過ぎないことが明言されている。松山洋平「クルアーンにおけるイエス」『クルアーン入門』453-454頁。

## おわりに

『混乱』は、16世紀前半にイベリア半島で著された一連の「反クルアーン」文学の系譜に位置付けられるものである。本書の特徴は著者アンドレスがイスラームからキリスト教への改宗者、モリスコであるという来歴と、カスティーリャ語で書かれた本文に、ラテン文字転写されたクルアーンの章句が多く含まれる点にある。このような転写文は、実際に非識字層の民衆のため、声に出して読まれることを想定されていたためと考えられる。このような現象は、16-17世紀にかけてモリスコたちが、アルハミーアのみならず、ラテン文字表記のカスティーリャ語でもイスラーム信仰に関する著述活動を行った現象と、パラレルな関係にあるといえよう。一方で、『反駁』の内容自体は、基本的に伝統的な反クルアーン論争の著作の文脈を受け継ぐもので目新しさはなく、クルアーンの記述を逆用してキリスト教の真正性を証明しようとするあまり、元アルファキーという経歴に疑念を抱かせるような引用や解釈も見受けられる。

本稿では詳しく触れることはできなかったが、『混乱』に含まれるイスラーム初期史に関する歴史解釈も興味深い。12章の記述によれば、イスラームの拡大はその信仰ゆえではなく、①無知蒙昧な人々への布教、②暴力を用いての改宗、③戦利品の分配の約束と戦死にともなう天国行きの約束といった3つの現世的な理由から生じたと論じている<sup>(46)</sup>。ここからは、改宗者であるアンドレスが、イスラーム的歴史理解からの脱却し、キリスト教的歴史観へ歴史的事象を接続している様子が見えがえる。イスラーム征服史、ひいてはアンダルス征服史に関する同時代のモリスコ知識人の認識については今後の課題としたい。

16世紀イベリア半島には、二つのロマンス諸語クルアーン翻訳の潮流が存在した。一つは、本稿で扱ったキリスト教徒がキリスト教への改宗を目的として行ったものであり、もう一つは「隠れムスリム」的性格を持つモリスコがイスラーム信仰護持のために行ったものである。この両者の間には、直接的な関係性は生じないように見えるが、そこを架橋す

(46) Andrés, *Confusión*, pp. 218-226.

クルアーンの翻訳と「反クルアーンAntialcoranes」文学：『ムハンマド信奉者の宗派の混乱あるいはそれへの反駁』を手がかりに

る存在が「反クルアーン」文学であり、この分野に関する研究のさらなる進展が期待される。

※本研究はJSPS科研費JP22K13234、JP23K25380の助成を受けたものです。